

# 震災から3年目

## 大槌町からの報告



東日本大震災から3年が経ちました。甚大な被害を受けた岩手県大槌町では、瓦礫がほぼ撤去され、町の中心部では盛土が始まっているものの、復興しているとはとても言えない状況です。

自身も被災した地元出身の保育士が、大槌町から報告します。

### 子どもたちと家族の思い

7年前に私は安渡<sup>あんど</sup>保育所に勤めていました。その時の教え子で、現在はこどもセンターを利用している4年生のNさんとお母さん、6年生のHくんとお母さんにお話を聞かせていただきました。

Nさんは震災当時、安渡小学校の1年生でした。安渡小学校の下にあった家は全壊し、現在は仮設住宅にお祖父さんとお母さんと3人で暮らしているしっかり者の優しい女の子です。

**Q** こどもセンターを利用した感想を聞かせて下さい。

Nさん「宿題ができる所が良い。友達と遊べる所が良いと思います。」

おかあさん「仮設に一人で留守番する事も出来ますが、やはり心配です。最初はセンターになじめるかどうか心配

でしたが、異年齢児とも関わりを持って遊ぶ姿を見て嬉しく思っています。」

**Q** 震災後からお子さんに気になる変化がありますか？

おかあさん「震災直後は津波の夢を見てうなされる等していましたが、今は大分落ち着いて過ごしています。町の別地区にある親戚の家や、県内陸部等へ避難しよそのうちにお世話になる事が多かったので、必要以上に他人に気を使うようになりました。大人になりすぎて可愛そうだなと思うこともあります。」

**Q** 4つの小学校が合同して大槌小学校になって、生活に変化はありましたか？

おかあさん「安渡では保育所も小学校も少人数で、全校生徒がまとまって、地域も学校との繋がりが強くみんなで子どもを見守るといった雰囲気でした。そこから規模の大きい小学校へ通うという事で始めは戸惑う部分もあったし、娘の友人関係のトラブルで悩んだ時期もあります。

少人数の学校に通っていた子ども達の方が環境に慣れるまで大変だったのではないのでしょうか。ただ今は多くの子どもとの関わり、安渡地区だけでは経験できなかった多くの人との付き合い方を学ばせてもらっていますから、合併されて良かったと思っています。」

**Q** 将来、大槌がどんな町になってほしいですか？

Nさん「人と動物、生き物や自然に優しい町になってほしいです。」

将来獣医になりたいと、動物が大好きなNさんは話していました。



Hくんは震災当時、大槌小学校の3年生でした。町の中心部にあった家は津波で全壊したうえに火災にあい、家財や思い出のものは何も見つからなかったそうです。そして隣の山田町で仕事をしていたお父さん、一緒に暮らしていたお祖父さんとお祖母さんを津波で亡くされました。お祖父さんとお祖母さんの御遺体は現在も見つかっていません。

**Q** こどもセンターを利用しての感想を聞かせて下さい。

Hくん「こどもセンターは過ごしやすい。なんか散歩しに行きたくなるんだよね。ホッとするっていうか安心するというか。家が近かったらもっと通いたいんだけど。」

センターの建つ寺野地区から遠く離れた赤浜地区の「みなし仮設」に住むHくんは残念そうに話します。

**Q** お子さんの震災後から現在に至るまでの様子を教えてください。

おかあさん「震災後はなかなか眠れない日や、突然泣き出す事が多かったんです。学校にも行きたくないと言われて悩んだ事もあります。ですから、震災1年目の4年生の時はうるさく言わずに自由に育てましたが、それが良かったのではないかと思います。」

現在は震災に向き合い、復興への取り組み等を経験して自分の意見をはっきりと話せるようになってきたように感じています。」

**Q** ご自身の気持ちに変化はありますか？

おかあさん「今まで生きる事について真剣に考えた事などありませんでしたが、震災で多くの方が亡くなり、この子



も私が居なくなったら一人ぼっちになってしまう。ですから今はこの子に何を残してあげられるかを考えて子育てをしています。金品や家といった財産ではなく、人を敬う気持ちを教えていきたいですね。

震災で亡くなった方々や子ども達は本当に可哀そうですが、生き残った子ども達には大きな試練を乗り越えたんだと思って、亡くなられた方々の分まで頑張って成長して欲しいと思います。」

**Q** 震災を振り返り現在の心境を教えてください。

Hくん「震災からの3年間がとても早くあつという間だった。3年間っていうととても長く感じるが、僕にはあつという間だった。乗り越えたのか？立ち直ったか？といわれると何とも言えない。……言い表すのは難しいし、正直複雑だけれど、3年たった今の状態は“落ち着いたっていうか落ち着いたかな”といった感じ。」

ガザから届いた絵の前で返礼に作った「のれん」をもって記念撮影



現在は勉強や大好きなバスケットボール等を一生懸命頑張っています。震災前、お父さんと共に参加していた郷土芸能の七福神会を一生続けていくと意気込んでいるHくん。将来は漫画家になりたいそうです。

## 遺骨でも良いから抱きしめたい

太平洋戦争の際、シベリアで亡くなった私の曾祖父の遺骨が見つかり、2月に約70年以上ぶりに大槌へ帰ってきました。70年という途方もない時間のよう感じられます。それでも遺骨の返還は私たちにとって言葉に表せないほどありがたいものでした。

親戚一同が「奇跡だ」と喜び、涙を流しながら曾祖父の遺骨に手を合わせる姿を見て、私は数日前に中学校来の友人Sさんのお墓参りにSさんのお父さんと一緒に行った時の事を思い出しました。

震災で自分の父親と子ども2人を失ったSさんのお父さんは「こんなきっかけもなければ最近はお墓の前に来ることも少なくなったよ」と穏やかな様子で私の訪問を喜んで下さいました。「この墓にはSの弟と、お祖父さんの骨が入っていないんだ。きっと津波の後の火事で燃えて無くなっ

ているんだろう」とつとめて元気に話されていましたが、高台のお墓から盛土が始まろうとしている町を見つめる表情はとても寂しそうで、掛ける言葉が見つかりませんでした。

大槌町で遺体の見つからない震災被害者は現在でも400名以上、全国では2600名以上います。“まだ見つからない”遺族の方々とお話す度に胸が締めつけられます。震災から3年が経過しました。遺族の方々はこれからも被災された御家族を待ち続けるでしょう。大槌町だけでなく被災された全ての地域で1つでも多くの奇跡が起こるよう願ってやみません。

※当会は大槌町で、2011年の3月後半から支援活動に参加してきました。こどもセンターは2012年4月に開館。放課後や夏休みなど、毎日50人近い小学生が来館し、遊んだり宿題を片づけたりしています。また地元のスタッフが郷土の伝統や遊びなども伝えています。



多数の犠牲者が出た旧大槌町役場は、震災遺構として保存される予定